

[課題演習概要]

子どもが安心して学ぶ環境を整えるために —教師の支援や配慮に着目して—

渚 上 真 由

Mayu FUCHIGAMI

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース
中等教科教育高度実践力プログラム

(2023 年 1 月 10 日受理)

キーワード： 学習環境 支援のあり方 意識調査 授業実践 特別支援

1 研究の目的

教育者は、子どもの学ぶ権利を守る学習環境を整えねばならない。「子どもの学ぶ権利を守る学習環境を整える」とは、その子が安心して学習できるように子どもの状況に合わせて支援や配慮を行うことである。何らかの困り感がある子どもであっても、教師の理解で「怠けている」と判断されれば、その子の学ぶ機会は奪われる。求められるのは教育者の対応力の充実である。

そこで本研究は、将来的に教育者となる筆者の子どもへの適切なサポートをする能力の進化を目的として行う。本研究は筆者という個人の進化を対象としているが、熟達者の思考傾向・対応傾向と比較する過程で見出される内容は、将来的に教育者となる、あるいは、子どもの学ぶ権利を守る学習環境を整える教育者となることをめざす多くの教育者に一般化できることではないだろうか。そういう意味で意義あることと考える。本研究の詳細は投稿中の論文「子どもが安心して学ぶ環境を整えるために」(渚上 2023)を参照されたい。

2 研究の計画

本研究は、次のように進める。まず、子どもをサポートする側の思考について、筆者自身と学校現場の教員への意識調査、熟達者の支援のあり方について考察する。次に、それらを踏まえた上で子どもの状態に対応する具体的な支援や配慮の方法を考案し、授業場面での実践を行い、その結果を考察する。

3 研究の内容

(1) 捉えられたこと

① 子どもの様相観察から

昼休みと放課後に英語の勉強会を設け、子どもとの対話を通して実態把握を行った。この様相観察を通して、学校には「単語の知識があるものの、複数の意味を持つ単語に混乱する」、「こだわりがあることで思うように勉強できない」、「自分に適した学習の選択ができない」等の困り感がある子どもが存在することが確認できた。そのような子どもの困り感を把握・解決するために、教師は子どもに対して「観察」「尋ねる」「十分な時間の確保」の3つを意識して行う必要があると分かった。

② 筆者自身の子どもの支援のあり方から

まず、TAである自己を対象に困っている子どもを見つける際の分析を、「座席シート」を手がかりとして行なった。それにより、誰にどのような声かけを行っているのか、また自分の動き方を考察し、捉えられた思考の傾向を整理した。その結果、これまでの自身の経験や学びを踏まえて得た「子どもの困っているサイン」を手がかりにしてスクリーニングしていることが分かった。他にも、子どもに支援を行うまでには無意識に自分の中でチェック項目と複数の段階が存在することが分かった。

次に、授業者として行った子どもに対する支援を対象に分析した。子どものつまずきを予想して準備したことは3点である。①ワークシートに活動の手順を記載、②説明の際に視覚的情報(イラ

スト、拡大したワークシート、ペアワーク用のスライド)を使用する、③子どもが活動で困ったときに使えるヒントカードの準備。

③ 教師への調査・インタビューから

1点目は、公立の中学校教員(計44名)を対象に読みの困難さの認知度に関する調査である。調査結果から、読みに困難さがある、又はその可能性が考えられる生徒を担当した経験があると回答した教師は全体の57%であることが分かった。一方、担当経験はないと回答した教師の中には、「本人の努力不足と思い込んでいただけかもしれない」という意見もあった。困り感の見えにくい子どもは、教師が意識的に見取ろうとしなければ見落とされる可能性がある。そのため、教師は多角的に子どもたちを観察し、適切な支援や配慮を行えるようになることが必要である。

2点目は、熟達者を対象に、授業前後で行っていることである。8項目を半構造化インタビューで行った。インタビュー対象とした熟達者は、小学校教員経験者1名、中学校教員経験者4名の計5名の教員である。各中学校教員経験者の教科は英語、家庭科、体育である。インタビューの回答から、どの熟達者も視野が広く、教室全体を見ながら子どもたちの様子を観察していた。しかし、熟達者それぞれで異なる部分もあった。例えば、「子どものために」という思いは同じであっても、子どもへのアプローチの仕方は違っているなどである。また、熟達者の中には自身の感覚で支援や配慮を行っている人(感覚派)と現場での経験を通して意識的にやっている人(経験派)の2つに分けられた。

④ 捉えられたこと

上記の分析を踏まえて、支援で重要視しなければならないことは、次の3点である。

まず、対象者を絞り過ぎず、子どもが自分のタイミングや使用の有無を選択できるようにすることが重要である。そうすることで、子どもが自分のペースで学習に取り組む環境が整う。

次に、支援に際しては、背景を考慮し、個人に寄り添った内容を提示することである。子どもの視点から支援を考えることで、より効果的なものになると考える。

最後に、子どもの支援においては必ず他者の視点を取り入れ、複数の考え方を頭に置いて捉えることである。教師の経験が影響して、無意識に支援方法に偏りが生じてしまうことが懸念される。そのため、意識的に他者の視点を取り入れる。

(2) 実践授業について

(1)の内容を踏まえ、再度、一斉授業を行った。

まず、改善したヒントカードである。これは子どもが自分のタイミングで使用できるようにタブレット上での配信を行った。周りの目を気にせずに使用可能になったことで以前より使用率は上昇した。

次に、目線の動かし方などインタビューから学んだことの活用における授業者への効果である。その活用により、以前より子どもの様子を見取ることが可能になった。このように熟達者の動きを参考にすると多角的に子どもを観察できる。加えて、授業者自身にも複数のアプローチから子どもに適したことを選択している安心感から、授業者の不安が解消された。

4 成果と課題

本研究の成果と課題は次のように考えられる。

まず成果として、筆者自身の子どもへの支援のあり方の分析により、観察に基づいていても子どもに対する見解に偏りがあることを発見した。そのため、他者の視点を意識的に取り入れる必要があると言える。また、インタビューを通して熟達者の知恵を得ることで支援や配慮の質の向上を目指したが、その他、その知恵が授業経験の少ない若手教員の安心材料にもなることが分かった。

次に課題として、支援や配慮を行う対象者の範囲を拡大していくことが考えられる。本研究での対象者は英語に苦手意識のある子どもにしていた。けれども、教室の中には学習に苦手意識がなくても様々な理由で困っている子どもが存在する。多くの子どもにとって学びやすい環境を整えるためには、今後支援や配慮の種類を増やす必要がある。そのために、対象とする熟達者の校種や教科等の幅を広げ、より多くの熟達者の知恵を蓄積したい。

主な引用・参考文献

- 近藤暁子 2022 小学校外国語指導における個人差の理解と個別最適化したまなびのための ICT 活用の可能性 兵庫教育大学 研究紀要 第60巻 91-98 頁
<https://cir.nii.ac.jp/crid/1050010293807039104> (最終確認 2023/1/29)
- 文部科学省 2022 通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/2022/1421569_00005.htm (最終確認 2023/1/29)